

公正な判断に基づく最適解を求めて検討を繰り返し、

「優れた問題解決者」を目指す生徒の育成

ー歴史的分野 「第二次世界大戦と人類への惨禍」の実践よりー

（実践者）江角 紀行

1 研究テーマ設定の理由

生徒たちが活躍する近未来の社会では、想像以上の変化や課題が起こり、「持続可能な社会」の形成がより難しくなることが予想される。そのような社会で期待されるのは、様々な課題に自ら立ち向かい、その解決に向けて多様な他者と協働しながらそれぞれの状況に応じて最適な解決方法を探り出していく力を持った人材である。そのような「優れた問題解決者」の育成には、学びの過程で習得した知識を「比較」や「関連付け」、「類推」や「未来予測」、「総合」等の思考スキルを活用し、課題に対する自分の意見をじっくりと分析したり、多様な他者との対話の中で何度も検討を繰り返したりして、公正な判断に基づく最適解を目指すような活動が重要である。そして、身に付けた資質・能力を発揮してよりよい社会の実現を視野に構想したり、自己変容を実感したりすることができるような学びの深まりも大切である。このような教材や他者との「つながり」、獲得した知識や技能の「つながり」を積み重ねていくプロセスが、深い学びにつながっていく。主権者の一人である生徒の「持続可能な社会」の形成に資する力の育成のためには、このような授業を積み重ねることが必要であると考え、本研究テーマを設定した。

2 研究の内容及び方法

(1) 問題解決的な学習の充実

生徒が自ら課題に向き合い、追究して他者と協働しながら解決に向かう鍵となるのは、生徒自身が学習の中に学ぶ意義を見いだすことができるかである。そのような実感を獲得できるように、学習したことを基に現代社会を見つめ、よりよい未来を構想する活動を問題解決的な学習に位置付けた。また、学習指導要領では、「指導と評価の一体化」が一層強調され、その共通項である目標を明確化、構造化することが成否を決定する重要な課題となっている。そこで、「改訂版タキノミー」（詳細は後述）の活用による教育目標の明確化と構造化を図り、生徒を本質的把握に迫らせることが、持続可能な社会の形成に貢献する主権者を育成する上で有効と考えた。

(2) 対話的な学びの充実

公正な判断に基づく最適解を生徒に求めさせるには、社会的事象の背景を熟考させることが大切である。そのため、その背景について事象同士の比較や関連付けなどを行いながら分析させたり、意見の妥当性について他者との議論を通して吟味させたりする場面を設定した。また、ツールミン図法を活用することで、追究成果を論理的に思考させ、議論の焦点化を図り、対話の質的向上を目指した。

(3) 資質・能力が育つ評価の工夫

「優れた問題解決者」を目指す生徒を育てるためには、習得した知識やスキルをよりよい社会の形成に向けて活用させることで、確かな社会認識を育て、現実的な課題解決のプロセスで必要となる思考力や実践力を身に付けさせることが大切である。また、学習後の振り返りにより成果

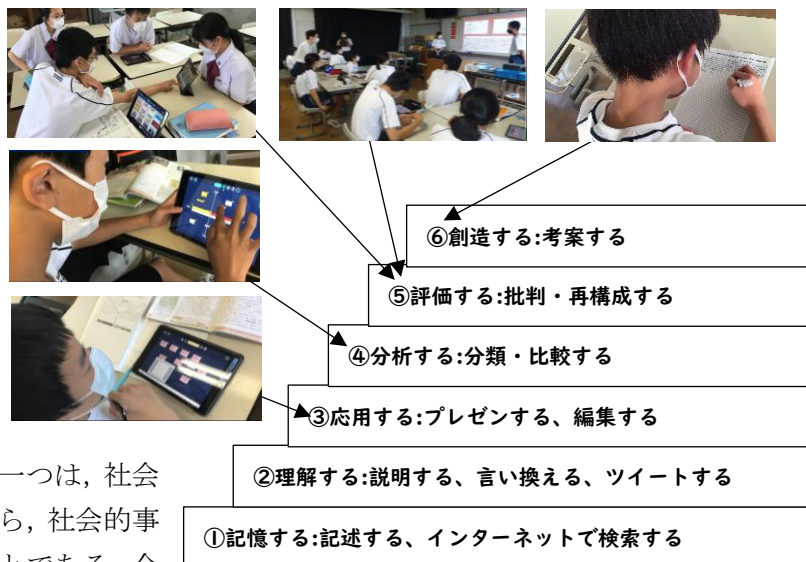
や課題をメタ認知させ、学びの質の向上を図ることも必要である。そのため、パフォーマンス課題の設定と OPPA (One Page Portfolio Assessment) を活用した。

3 研究の実際

(1) 指導の計画

ア 問題解決的な学習の充実

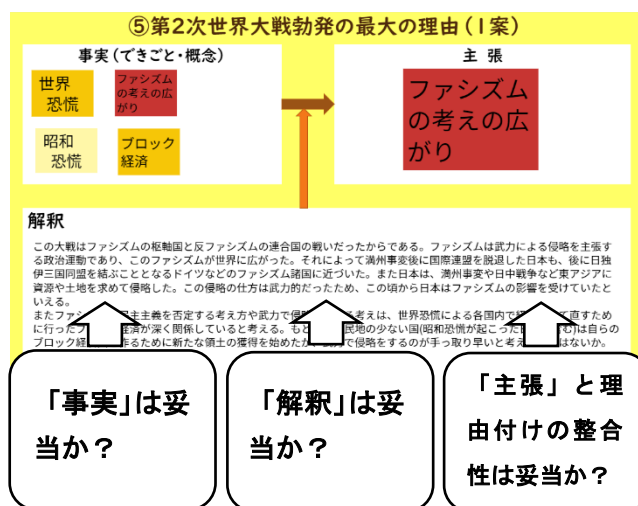
歴史学習の目的は、過去から学び、人類が生存していくための手掛かりを得ることである。つまり、「歴史を学ぶと未来が見えてくる」ようになる必要がある。そのことを生徒に実感させ、生徒が歴史認識を深めていけるような問題解決的な学習の充実を図った。教材への深い理解の条件の一つは、社会的な見方・考え方を働かせながら、社会的事象を多面的・多角的に捉えることである。今回は、「近代の日本と世界」学習後の発展学習として、



資料1 改訂版タキノミーに基づく学習過程
第二次世界大戦勃発の最大の理由を考察することから、現代社会を捉え直し、第三次世界大戦勃発の確率を未来予測させた。そして、その学習過程の視座として「改訂版タキノミー」（以下、「改訂版」と略す）を活用した。「改訂版」とは、ブルームらにより開発された「教育目標の分類学」の認知領域を改良し、教育目標を四つの知識次元（「事実的知識」・「概念的知識」・「手続的知識」・「メタ認知的知識」）と6段階の認知過程次元（「記憶する」・「理解する」・「応用する」・「分析する」・「評価する」・「創造する」）に分類したものである。教師は目標の明確化により目標の意味内容を深く理解することができ、指導や評価方法の基盤として用いて意図的に知識の側面と認知過程の側面の発展を図ることができる。この「改訂版」の理論を基に、第二次世界大戦勃発の理由の発散→世界・日本・政治・経済の分類→事象間の関連付け→事実の順序付け→妥当性の視点からの練り合い・高め合い→パフォーマンス課題の活動を設定した（資料1）。また、追究時はロイロノートを活用し、思考ツールを基に思考したり、多様な意見を集約したりして、考えを深めさせた。このように、構造的かつ効率的な学習展開を通して、生徒の深い理解を目指した。

イ 対話的な学びの充実

公正な判断に基づく最適解を生徒に求めさせるには、社会的事象の背景を熟考させることが重要である。そのため、他者との議論を活性化させる工夫をした。議論を通して身に付く力には、次の三つの力が考えられる。「自己の考えを調整・深化させる力」、「多様な考えを基に他者によりよい考えを導き出す力」、「人間関係の調整力」である。そして、その議論の活性化の重要な鍵となるのが意見の「対立と合意」である。そこで、まずは個人で単元を通して習得した学びを基に、トゥールミン図法を活用して、第二次世界大戦勃



資料2 トゥールミン図法による思考シートと妥当性を検討する三つの視点

発の最大の理由と第三次世界大戦勃発の確率について論理的に考察させた。次に、小集団で「引用した事実の妥当性」「事実に対する解釈の妥当性」「主張と理由付けとの妥当性」の三つの視点から検討し合い、自己の考えを調整・深化させた（資料2）。そして、それらの多様な意見を基に、グループ内の対立した考えを調整し、よりよい考えを創造させた。さらに、学級全体でグループごとに発表し、三つの視点から練り合わせることで、自分たちの主張や根拠を補強し、より確かな意見になるように判断させた。そして、学級全体での議論を通して、新たに習得した知識や技能、視点等を活用して、自分の意見を公正な判断に基づく最適解に向けて修正し、深い理解へ促した。

ウ 資質・能力が育つ評価の工夫

よりよい社会や自分を志向することにつながるパフォーマンス課題（前述）とルーブリックを設定し、評価した。

	思考・判断・表現	
A	○B評価の基準を満たした上で、第二次世界大戦が起こった理由や今後、世界平和のために私たちに必要なことについて多面的・多角的に考察し、表現することができている。	まず、第二次世界大戦の最大の理由についてですが、最大の理由は「世界恐慌」だと考えます。その理由としては、世界恐慌が起こったことで、経済が不況におちいり、ヨーロッパ諸国が侵略的な行動をおこなったからです。詳しい経緯としては、ベルサイユ条約が決まり、敗戦国の植民地や領土が縮小します。そこで世界恐慌がおこることで、各国がブロック経済を行い、領土が狭い国は、ブロック経済を行えないため侵略的な行動に出ました。このようにことから、第二次世界大戦の最大の理由（きっかけになるもの）は、世界恐慌だと考えます。次に、第三次大戦が起こる確率についてですが、私は、15%の確率で起こると考えます。まず、戦争が起こりうる要因として、最近の北朝鮮が北朝鮮、北朝鮮の世界恐慌のこのように経済状況が世界的に不安定になること考えます。また、近年アメリカと中国の貿易摩擦なども起こり、大国同士の戦争が起こる可能性が高まっていると思います。しかし、大戦が起こらない要因として、国際連合の決まりとして戦争は、行てはいけないようになっていたり、核保有国は、国際連合で決められていたり、核の使用制限が決まっていたりしています。このような多数の要因の中でも私は、国際連合が大きい要因だと思えます。多分が加わし、核が集中している国際連合の決まりとして、戦争は行てはいけないので、大戦は起こりにくいと考え、第三次大戦勃発の確率は15%になりました。最後に、第三次世界大戦を起こさない上で、私たちに必要なのは平和主義の考えだとおもいます。日本は、唯一、核ミサイルが落とされた国でもあり、憲法の中にも、第九条などに平和主義の考え方が記されています。そして、第二次世界大戦の終わりに戦争を引き起こさないために平和主義を語って、戦争は絶対に起こしてはいけないことを伝えていく必要だと考えます。戦争を経験したことがある方がいなくなる。いる今、中、高生の若い世代の人が実際に戦争を経験していないことも考慮して、世界大戦について学んだ者として、戦争の恐ろしさなどを伝えるとともに、平和主義の考え方をもち、次世代に語り次ぐことが最も必要だと考えました。
B	○第二次世界大戦が起こった理由について、第一次世界大戦後の世界の政治・経済の動きや変化、我が国への影響などの中から考え、それを踏まえながら、今後、世界平和のために私たちに必要なことについて論理的に考察し、表現することができている。	
C	○第二次世界大戦が起こった理由や今後、私たちに必要なことについて、論理的に考察し、表現することができていない。	

資料3 生徒Aのパフォーマンス課題

本パフォーマンス課題は、生徒に習得させ

た知識やスキルをよりよい社会の形成に向けて活用させることで、確かな社会認識を育て、現実的な課題解決のプロセスで必要となる思考力や実践力を身に付けさせ、「歴史を学ぶと未来が見えてくる」ことを実感させることをねらい設定した（資料3）。また、主体的な学びの充実には、「見通し」と「振り返り」が大切である。その実現に向けてOPPAを活用した。OPPAとは、「教師のねらいとする授業の成果を、学習者が1枚の用紙の中に学習前・中・後の学習履歴を記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法」である。第二次世界大戦勃発の最大の理由と第三次世界大戦勃発の確率について、個人で作成した第1案と他者との議論を通して作成した最終案を比較し、メタ認知により自己の変容に気付かせ、自分自身に対する有能感の高まりを感じ、次の単位でも最適解を求めて追究し続けようとする態度の涵養を目指した（資料4）。



資料4 OPPIA

(2) 指導の実際

ア 単元名

近代の日本と世界（カ）「第二次世界大戦と人類への惨禍」（第3学年）

イ 単元目標

- 第二次世界大戦と人類への惨禍などについて理解することができる。 「知識及び技能」
- 経済の変化の政治への影響，戦争に向かう時期の社会や生活の変化，世界の動きと我が国との関連などに着目して，事象を相互に関連付けたり，近代の日本と世界を大観したりして，近代の社会の変化の様子や時代の特色を多面的・多角的に考察し，表現することができる。 「思考力・判断力・表現力等」
- 近代の日本と世界について，国際平和の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする。 「学びに向かう力，人間性等」

ウ 重点目標

<本質的な問い>

繰り返された世界大戦を次に起こさせないためには，どのようなことが必要だろう。

<永続的な理解>

世界恐慌による世界的な経済の混乱や社会問題の発生，ファシズムの台頭，世界の動きと我が国の動きなど，多様な事象が複雑に絡み合い，第一次世界大戦の反省は生かされず第二次世界大戦が勃発し，人類に惨禍を及ぼした。現在も新型コロナウイルスの影響による不況が世界中に広がっていたり，核ミサイル保有国が拡大したりするなど，危険な要因は多く点在している。自国優先ではなく国際協調の精神を各国が重視し，国民も自国や世界の政治や経済の状況を注視し，平和な国家や国際社会形成のために関わっていこうとすることが大切である。

エ 評価規準と評価方法

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
経済の世界的な混乱と社会問題の発生，昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治・外交の動き，中国などアジア諸国との関係，欧米諸国の動き，戦時下の国民の生活などを基に，軍部の台頭から戦争までの経過と第二次世界大戦と人類への惨禍などについて理解している。	①経済の変化の政治への影響，戦争に向かう時期の社会や生活の変化，世界の動きと我が国との関連などに着目して，事象を相互に関連付けるなどして，近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し，表現している。 ②近代の日本と世界を大観して，時代の特色を多面的・多角的に考察し，表現している。	近代の日本と世界について，よりよい国際平和の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。
パフォーマンス課題		その他の評価方法
あなたは歴史研究者です。今回，Aテレビ局から終戦記念日の8月15日に放送される特別番組「3回目の世界大戦を起こさないためには？」への出演依頼が来ました。番組プロデューサーは、「この番組は，戦争経験者が年々減少する中，特に今後の時代の担い手となる若者世代に向けて発信したいと考えています。そこで，まず前半では，なぜ第二次世界大戦が起こったのかという理由について議論していただきます。そして，後半では3回目の世界大戦が勃発する確率を世界の現状の分析を基に説明していただき，最後に勃発させないために今後，私たちに必要なことについて主張していただきます。」と説明しました。みなさんは，この番組で何を語りますか？		○観察 ○ワークシートへの記述 ○ロイロノートへの記述

オ 指導計画（全 14 時間） ※ここでは、発展学習にあたる三次の指導計画を示す。

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
三次	11	・各自でロイロノートを活用して、第二次世界大戦の背景を熟考したり、現在の世界や国内情勢から第三次世界大戦が起こる可能性を未来予測したりして、学習したことを実社会に生かそうとする。	思 態	・既習事項を基に、ロイロノートを活用して第二次世界大戦勃発の理由を多面的・多角的に考察している。 （ロイロノート） ・過去のできごとの因果関係を生かして、現在を見つめ直し、未来の社会を予測している。 （ロイロノート）
	12	・グループ内で自分の結論を発表し合い、結論の妥当性について議論し、自分の意見を調整する。	態	・妥当性に関する仲間からの意見や仲間の発表内容から、自分の結論をよりよいものに調整している。 （ロイロノート）
	13 本時	・学級全体で、各グループでの結論を発表し合い、相互に三つの視点から妥当性について議論し、自分の意見を調整する。	思 態	○ ○ ・第二次世界大戦勃発の理由や現代社会の特色を多面的・多角的に捉え、事象同士を関連付けて考察している。 （ロイロノート） ・多様な意見から分析や検討を繰り返して、生徒が最適解を目指して自己調整しようとしている。 （ロイロノート）
	14	・パフォーマンス課題に取り組み、軍部の台頭から戦争までの経過や第二次世界大戦と人類への惨禍などを踏まえながら第二次世界大戦勃発の理由について考察したり、大戦の反省から第三次世界大戦を起こさないために必要なことを考えたりして、世界平和を希求しようとする。	思	○ ・総括的評価

(3) 生徒の学びの実践

自分の考えについて振り返って、よかったこと、足りなかったこと、新たな発見は？

第三次世界大戦が起こる理由として、始めの意見では戦争が起こる理由について書くことは出来ていたが、戦争が起こらないと考える理由について書いていなかったため、最終案では、他の班の考えや、今の情勢も踏まえて、多面的に根拠付けすることが出来たと思います。また、過去の伝染病などをもとにコロナウイルスではどの様に世界が変化するかを論理的に考えることが出来ました。多面的に物事を判断し根拠付け論理的な主張を行う力がよりついたため、その点は成長出来たと思います。コロナウイルスなどの経済的な影響の面からは考えることが出来ましたが、今の様子を政治的な面から読み取る力が足りていないと思うので、公民分野などを通して政治の面からも物事を見れる力を伸ばしていきたいです。

資料5 生徒Bの学びのふりかえりシート

資料5は、生徒Bの学びのふりかえりシートである。これまでの学習を振り返り、第二次世界大戦勃発の最大の理由と第三次世界大戦勃発の確率についての1案と最終案を比較し、その変容から成果や課題等が記述されている。生徒Aの記述内容からは、1案の根拠が不十分であることに自ら気づき、最終案では他者の意見や現在の社会情勢を踏まえ多面的な根拠に調整している点、過去の伝染病の事例から新型コロナウイルスが世界に与える影響について類推することができている点、以前よりも論理的に説明できるようになった自分の成長に気付いている点、説明において政治の視点がない課題に気づき、今後の公民の授業で学ぼうとする主体的な態度が見られる点などが読み取れ、本実践が生徒の深い理解に一定の有効性を示していたことが伺える。

また、先述のパフォーマンス課題の結果として、生徒64人の中でA評価は28人、B評価は27人、C評価は9人であり、約40%の生徒が第二次世界大戦勃発の理由や今後、私たちに必要なことについて多面的・多角的に考察していることが分かる。一方で、一面的な考察や課題に沿わない考察の生徒が約60%おり、指導の見直しが必要である。

4 成果と課題（○成果 ●課題）

- 歴史学習の目的は、人類が生存していくための手掛かりを得ることであり、「歴史を学ぶと未来が見えてくる」というようにならなくてはならない。本実践は、そのような歴史を学ぶ意義を生徒に実感させるものであった。
- 情報の収集や共有、振り返りなど随所に ICT（ロイロノート）の活用が見られ、活動が効率的で理解を深める上で効果的であった。
- 魅力あるパフォーマンス課題があることで、生徒の意識を新しい挑戦に向かわせ、課題解決への意欲を喚起することができていた。
- OPPA によって授業の全てがポートフォリオになっていて、生徒は授業のプロセスの様々な場面においてリフレクションしたり、自分自身の成長をメタ認知して成長を実感したりすることができた。
- 三つの妥当性について討論という形態は取り入れているが、まだまだ生徒同士が発表して終わりという印象に終わっており、そもそも教師が見守っているだけで議論に参加していない。ヴィゴツキーの提唱する「発達の最近接領域」の考え方にあるように、生徒同士だけでは到達できない領域に教師の適切な関与により生徒を引き上げることが必要である。
- 生徒の発言は、まだまだ公式見解的な認識に終わっており、人間の行為について本音でどれだけ考え、意見を発表できるかが社会科の本質である。そのように、社会には本音と建て前が共存している難しさを生徒に感じさせることが、中学校段階での最終的な合意形成の在り方を学ぶことになる。
- パフォーマンス課題の評価について、妥当性と信頼性の確保が必要であり、評価者が変わっても結果が同じかという「評価者間の信頼性」、評価者が継続して同じ評価ができるかという「評価者内の信頼性」などを高めていくために評価規準や評価基準の吟味が必要である。

また、授業後の社会科アンケートで「あなたの学習の理解において、終戦までの授業後に実施した発展学習はどの程度有効でしたか」の項目について、「とても有効であった」74%、「まあまあ有効であった」24%、「どちらともいえない」2%という結果で、約 90%の生徒が有効であったと感じており、おおむね本実践が効果的であったことが伺える。今後も、上記の成果と課題を踏まえながら、生徒の社会認識を深め、持続可能な社会の形成に資する主権者としての力を育成できるように実践を重ねたい。

参考文献

- ・澤井陽介・加藤寿朗（2017）「見方・考え方」東洋館出版社
- ・田村学（2018）「深い学び」東洋館出版社
- ・西岡加名恵・石井英真（2019）「教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価 「見方・考え方」をどう育てるか」日本標準
- ・原田智仁（2018）「社会の授業づくり」明治図書
- ・堀哲夫（2019）「一枚ポートフォリオ評価 OPPE 一枚の用紙の可能性」東洋館出版社
- ・文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編」東洋館出版社